

## 紹介

王朝の庶民階級

三木市史

西田直二郎著

### 王朝の庶民階級

西田先生がなくなられてすでに六年以上の歳月がながれたが、本書は夫人が先生の七回忌を偲ぶ艸として印刷に付された、先生の学位論文である。一世を風靡した『日本文化史序説』のほか、諸論文はすでに生前『京都史蹟の研究』や『日本文化史論考』として著書に纏められたことは周知のことであるが、この学位論文は生前にはついに陽の目をみるこがなかった。それはおそらく、完璧を期そうとされたためであろうが、それを夫人があえて印刷に付された理由を、夫人は「古く西田の講義を聴いて頂いた方々の想い出とただでなく、今後の若い方々に、少しでもお役に立つことにな

りますならば、西田もよるこんでくれることでしょう」とのべられている。ところで、本書は、序説——庶民階級の研究と文化史、氏族制度と職業階級民の発達、庶民の法制、富民の発生、平等の観念、都市の生活及住民集中、平安朝文化と庶民階級の七章からなりたっている。右からも明らかのように、それは庶民階級に視点をあてて、奈良平安期の文化形成の基盤を総括的に分析されたものである。すでにほぼ半世紀をへているが、現在私たちにもすぐれた、示唆に富んだ部分が少なくない。ところで本書であえて庶民階級を分析の中核におかれたのは「この階級が一般社会生活の上に於ける職能を明らかにし、文化発展の上に於ける職能の考察」をするためであった。そうして、従来の研究に対しては「庶民階級に関する研究の進歩せざりし最大の原因は庶民に対する理解の足らざりしことにある。庶民階級意識が発達せざるところに庶民階級の正しい研究が興らない」とし、従来の研究の多くが「民衆の生活はただ為政者、偉人の行動の対象としての存在であったにすぎない」と、「政治史的歴史観」をするどく批判し、「従来等閑視せられた部分に対して

其価値を認証して、それを正当なる標準まで持ち来たすこと」が必要であると論じ、その点から文化史研究とその運動を評価されている。内容については、例えばこの前後に発表された「平安文化と庶民階級（大正七年）」「平安期における貨幣の使用及流通について」（大正一五年、いずれも『日本文化史論考』収）などと密接に関連している。しかし、昭和に入ると研究の中心はいわゆる文化的要素の分析に中心が移る——内的に関連することはいうまでもないが——のに対し、大正の後半期には文化を担う民衆・庶民に視点があてられていることは留意されてよいと思う。この学位論文の執筆される四年前、三浦周行は『国史上の社会問題』を上梓しているが、それらが「大正デモクラシー」の社会風潮と密接な関係があったと推測することはできないであろうか。

近年ようやく、新しい視角にたった平安時代研究が生まれようとしているが、わたくしした後輩は現代社会に立脚して本書から多くのもの学び、より学問の進展に努力しなければならぬ。先生の御冥福と、夫人の御多幸とをお祈りして、つたない紹介

をとじたい。

(A5判 一六五頁 昭和四五年一月七日刊  
非売品)

(佐藤 宗毅)

## 三木市史

三木市は加古川の支流美濃川流域に属する、旧三木町・久留美村・別所村・志染村・細川村・口吉川村が合併して昭和二十九年に発足した市で、金物業で有名な人口四万の小都市である。本書は市制十周年記念事業として調査・研究が開始され、六年を経て完成された。

本書の特徴は、通史編と各説編とはほぼ二分されていることである。通史編は「三木市の自然と集落」「伝承の世界」に続いて、古代・中世・近世・近代の三木地方、及び「三木市の発展」の七章からなっている。最近の地方史誌類は歴史的な叙述を先史時代の遺物・遺跡からはじめるのが普通だが、ここでは「播磨風土記」・記紀などによって郡の起りや伝説などから説き起している点が変わっている。これは考古学的な

研究の殆んどが各説編の方にまわったため、第三章「古代の三木地方」で古墳時代の説明が簡単になされているにとどまる。

中世以前の在地の文書がないため、中世の章の叙述は簡単だが、藤原定家の所領であった細川庄の興廃を中心に三木地方の中世史が要領よくまとめられている。近世の三木の町は地子諸役免許の地であったが、その特権の根拠となったのは天正八年の秀吉の制札であったという。これが最古の在地文書であるが、落剥の甚しいこの制札の写真がコロタイプ版の口絵に出ている。見栄えのよい墨跡や肖像画の代りにこれを巻頭に用いた編者の苦心が思われる。近世の町の動きは、商人仲間の組織・三木川通船をめぐる争論・金物業の発展など、適確に紹介されている。近代を扱った第六章は、統計表を数多く引用してくわしく叙述してあるが、三木地方全体としての歴史は「行政区画の変遷」に限られている。具体的な内容は人口・農業・工業・商業・交通と通信・教育・民生・警察と消防、の各章に分けて記されているので、例えば「商業」の節のように現状分析中心の部分と「教育」の如く歴史的推移中心の部分とのアンバラ

ンスが生じると、近代の三木の発展のイメージがまともでとらえ難いからいがある。

各説編は、一「考古学上からみた三木地方(加古川流域)の古代」・附載として「吉田遺跡」・「加古川流域須恵器編年」・「三木市の古窯と経塚」、二「条里制遺構の分布」・三「三木戦記」・四「宝蔵と惣年寄十河家」・五「鍛冶屋と金物問屋」・六「文化財」・七「民俗」・八「三木の言語」・九「三木市民の生活圏」・十「労働力人口としてみた三木市民」・十一「三木市の植物と昆虫」からなっている。気附いた点を二・三あげると、一は三木市域にこだわらず加古川流域全般を対象とした力作である。

遺跡の発掘調査の成果をくわしく紹介しながら、最新の考古学の理論を援用して、弥生時代の「ムラ」から「地域的政治集団」への発展を東播地方に具体化し、大和政権の歴史の中に位置づける努力を行なっている。八は日本語地図作成のために「古老の言語を調査したもので、このようにくわしい調査データの紹介は市史としてはめずらしいが、方言を通して地方色をゆたかに誌面に反映できるいい企画である。九は商圏の実地調査報告で、三木現市域が生活圏